文苑

積誠

助教授　含紫樓主人

某の日の黄昏に、教子の矢野といふ者の家に、事ありて、行きけるに、在りつれば、入りて、不意、仰きみるに、天井もなく、茅葺のうちに、額一つ二つ、掛けたり。くろ〳〵と、燻ぼりて、色も見えわかず。燈とも云て後、よくみれば、唐もじの摺物をしたるありけり。さて〳〵、いみじき物を、と言へば、あはれ、善き物にや侍る、親の世より掛かりけるをよくも、得しらず、見はべり、と言ふ。しばし、あかし擎げてむ、寫さまほし、硯かし給へ、といふまゝに、どういでつゝ、起ちて見つゝ、書きうつしける。先づ積誠と大なるもじ云て、次に、余初見之次年。即乞余書至今踰十年。而未之應。不怒亦不怠。而請之不已。可謂誠矣。可謂誠之積矣。推是心。而尊德好善。其有不進於賢人君子之列者乎。故爲之書。とかきて、後に明舜水朱之瑜としるし、印おせり。ろの筆の優れたる、更よもいはず。書を乞ひし人、いろある人にかありけむ、直人にはあらず、どれもひさだめたらむ、決しや。十とせの間、ね書かざりけるも、かゝざりけるあり。一日の如と、乞ひて憤もせず、撓もせざりける人も、人あり。止まざりしは、げにも誠あり。つゝみて、かゝざりしも、誠にやあらむ。誠わらむ人なれはこそ、この誠の人もいで來にけめ。ろの志の透ぬ云も、ろの誠の

堅かればなりげにも、この心を推さもてゆらば、なぞら賢き人の列にも數まへられざらむ。さても、一枚の書をだにも、かうやうの誠の至らむ、さすがに、昔の人なりけり。甚しく尊し。こゝらの人、口々にころ、さはいはめ。いろでか、聞くとも及びいたらむ。思ひて、顧みれは、汗あゆる心地ぞしける。とて、ろの人の本末をも、いひ聞かすれは、かしこしや、さりとは、我が身ながらあさましくころ、晨て煤をぞおとして、きよめ侍らむといひ居たる、誠みえて、いとうれさ。

二月の十五日炊事紀念會によみて遣しける　稼堂

あさなゆふなをりたく柴の煙にも末の世かたゞ盡きすやあるらん

事にふれて涙なからによめる

事ことにろへらぬ人のあとゝめてれもひいやます涙かはかな

貴田氏の母刀自より鶯宿梅一枝ををりてれくふれけるをよろこひてよみて遣しける

鶯の來てわろ宿をとひもせさとふとも我やよきにこたへむ

我か宿にくるよしもかな鶯のすむてふ梅の枝よひかれて

七重八重さく梅かえのめつらしき花をまつまの心つくしに

阿蘇の社にて國賊追討の　綸旨と螢丸の刀とをみ侍りける時によ